熊本城

加藤清正の軌跡をたどる。

名君が残した歴史遺産と心に触れる戦国の世へ時間旅行のススメ

路面電車が走り、人が行き交う喧騒の中、熊本市の中心部にそびえ立つ熊本城―。はるか遠い戦国時代に、かの加藤清正がこの地を選び、築城に踏み切った当時からいつの時代もここが熊本の中心だった。荒れ果てた肥後の大地を再生し、田畑を潤し、また人々の暮らしを潤した名君は、今も市民の心の中に生き続けている。そんな加藤清正の生誕450年を迎え、彼が築き上げた熊本城界隈を歩いてみよう。受け継がれてきた遺産や城下町の文化、そして清正の心に触れる旅が始まる。

文／松本美幹子　写真／小田﨑智裕
書／古賀廣昭
監修／熊本大学文学部附属永青文庫研究センター教授　稲葉継陽
協力／大阪城天守閣　本妙寺

幼き日、清正の名は「虎」。秀吉子飼いの武将として頭角を現す。

加藤清正

『加藤清正像』。永禄5年（1562）尾張愛知郡中村（現愛知県名古屋市中村区）生まれ。天正16年（1588）肥後藩主となる。慶長16年（1611）没。享年50歳（本妙寺所蔵・熊本県立美術館撮影）

熊本は、中心部の小高い丘の上に、勇壮な城をいただく街だ。人々は通勤・通学の道筋、移ろう季節を映しつつもいつも変わらずそこにある姿を目にし、天下の名城を築いた武将が治めたこの地に暮らす誇りを、日々新たに胸に刻む。

日本三名城のひとつ、熊本城を築いたのは言わずもがな、築城の名手・加藤清正である。清正は豊臣秀吉の命を受けて肥後の国を治め、朝鮮に出兵して戦った。〝虎退治〟に象徴される勇猛果敢な武将、治水や干拓の技術に長けた土木の神様……。今も熊本県民に「清正公（せいしょこう）さん」と呼ばれ絶大な人気を誇る清正の、世間に流布するイメージは凡（およ）そこんなところだろう。

しかしながら、その実像はほとんど知られていない。まず、その出自からしてはっきりしない。一説によると清正の母・伊都と秀吉の母なかが従姉妹の間柄だったとも、伊都と秀吉の妻ねねが遠縁だったともいわれるが、定かではない。いずれにせよ永禄5年（1562）に生まれ、10代の前半に秀吉に仕え始め、19歳で初陣を飾ったらしい。清正の名前が最初に登場するのは天正8年（1580）9月19日付「羽柴秀吉判物」で、19歳の「加藤虎」（清正の幼名）は120石の知行地を与えられている。初めて華々しい活躍を見せるのは天正11年（1583）、かの有名な「賤ヶ岳（しずがたけ）の戦い」でのこと。「七本槍」の一人として柴田勝家軍と戦い、その戦功で秀吉を大いに喜ばせた。こうして秀吉子飼いの武将として、清正は徐々に頭角を現していく。

（1）熊本城を背に、床几（しょうぎ）に腰掛け采配を振るう清正公の像。場所は「市民会館崇城大学ホール（熊本市民会館）」や国際交流会館が並ぶ市内の一角　（2）「賤ヶ岳合戦図屏風」。羽柴（豊臣）秀吉軍と柴田勝家軍の合戦を描いたこの屏風絵には、「七本槍」の一人として勇ましく戦う清正が「加藤虎之介」の名で登場している（大阪城天守閣所蔵）　（3）清正が造ったといわれる「鼻ぐり井手」（菊池郡菊陽町）は、阿蘇の火山灰を堆積させない工夫が施された農業用水路で今も現役　（4）かんがい用として清正が造ったと伝えられる「井樋（いひ）橋」（熊本市富合町）も、当時の姿のまま今なお役目を果たしている　（5）清正の時代から貿易港として栄えた熊本市川尻の船着場。清正は東南アジアとの貿易にも力を入れた

エリート行政官・加藤清正
暴れ馬のまち・肥後へゆく。

重要文化財「宇土櫓（うとやぐら）」。西南戦争の戦火を奇跡的に逃れ、往時の姿を留める。3層5階という規模から「三の天守」とも呼ばれるが、築城当時は同規模の櫓が6棟存在したという。内部は見学することができる

とはいえ、この頃の清正には、同じく秀吉子飼いだった石田三成や福島正則のような華やかさはない。清正は戦場で活躍するより、後方支援や戦後処理に当たる事務方としての才に優れていた。戦に当たって物資の調達や金銭の工面をし、戦後はその地を再建する業務をこなしていた清正は、やがて「主計頭（かずえのかみ）」の地位に就く。これは豊臣家の財政を担当する重要な役職であった。

天正16年（1588）、ついに清正大出世の時が訪れた。前年に起こった「肥後国衆一揆」の責を問われ切腹した前藩主・佐々成政の後任として、清正と小西行長に肥後国藩主の任が下ったのだ。清正は肥後の北半分と南の一部をあてがわれる。

現存する「豊臣秀吉朱印状」によると、清正に肥後半国を与えた理由を秀吉はこう述べている。「清正は何事にも精を出し、役に立つと見込んで肥後に領地を与えた」。これまでの功績によってというより、お前ならやればできるだろうと可能性を見込まれての人事であったことが分かる。戦で敵の首を討ち取るような派手な活躍はなくても、経済を重視し、天下統一の体制作りを進める秀吉にとって、自らの理念を忠実に実現してくれる清正の〝エリート行政官〟としての能力は、重要なものだったに違いない。こうして清正は、国衆一揆で荒れた暴れ馬たちの地・肥後へと乗り込んでいく。時に27歳。約4千300石の知行高から約19万5千石へと、異例の大抜擢だった。

清正肥後拝領後程なく、秀吉の朝鮮出兵が動き出す。天正20年（1592）から始まった朝鮮戦役は休戦を挟んで文禄・慶長の役の2度にわたり、清正も出兵を余儀なくされた。特に慶長の役における蔚山（うるさん）城での籠城戦は過酷を極めた。食糧も尽き疲弊しきったところを敵の大軍に城内に攻め込まれ、援軍に救われたもののまさに九死に一生を得る状況だった。この経験が帰国後に始まった熊本城の築城に多大なる影響を及ぼすことになる。

小天守から外へ出ると左の石門をくぐり、ここ不開門（あかずのもん）東側の曲輪（くるわ）に至る。右側の石門は、平左衛門丸北下の帯曲輪へと続く。排水のための施設とも、秘密の抜け穴ともいわれる

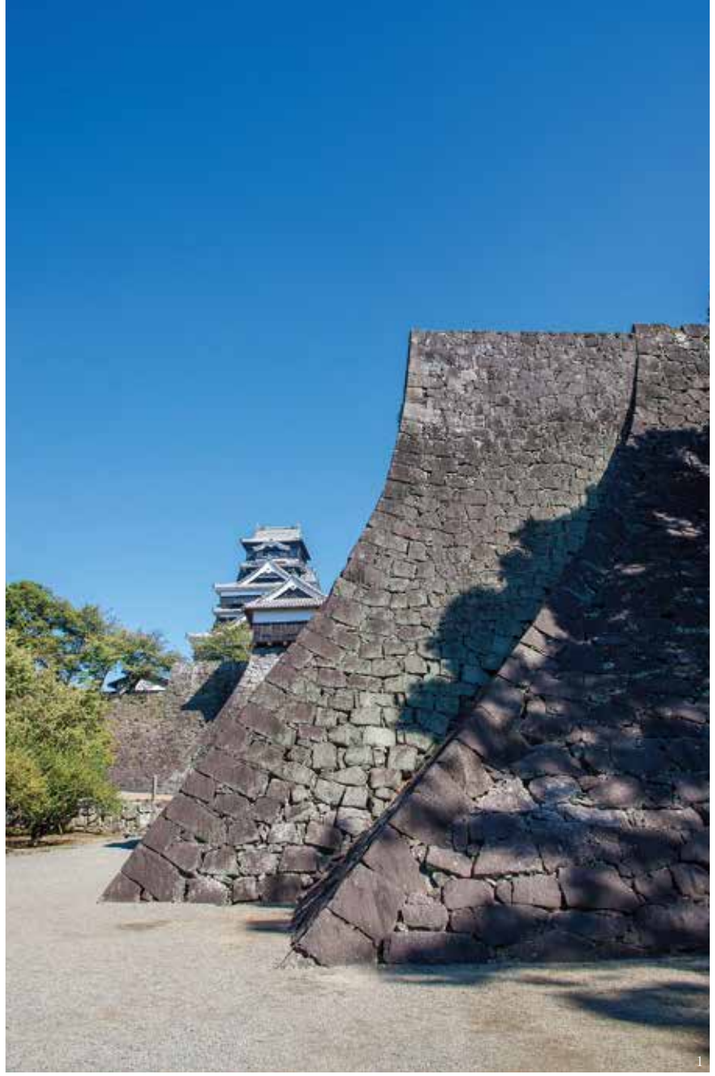
朝鮮出兵の辛酸を糧に
技術の粋を尽くして築いた難攻不落の城。

南部の小西領を占領し、肥後一国の藩主となった清正は、この頃から新城の建築に着手する。熊本城を一言で形容するなら〝難攻不落の城〟というのが諸人の一致するところであろう。複雑な縄張を持ち、侵入した敵を殲滅させんがための仕掛けが至る所に施された。城内に踏み入った敵はまず、複雑に折れ曲がった通路を進まされる。前をうかがい知れない上、通路を囲む石垣の上にはずらりと櫓が並び、数多設けられた狭間から注がれる矢や鉄砲などの攻撃を受けねばならない。石段はわざと路面がふぞろいに造られ、一段ごとに段差も変わり、進みにくいことこの上ない。

よしんば天守までたどり着いたとして、そこにあるのは「武者返し」と呼ばれる上に行くほど傾斜が急になる石垣だ。この石垣を登り切り、天守に入り込める者など一人もいなかったことだろう。戦に勝つことをとことん追求した造りは、究極の機能美を感じさせ、潔い。

また、蔚山城での戦の経験からか、籠城への備えも盤石で、城内には120基を超える井戸が掘られ、畳には食糧となるよう「ずいき」と呼ばれる芋の茎が編み込まれていたという。

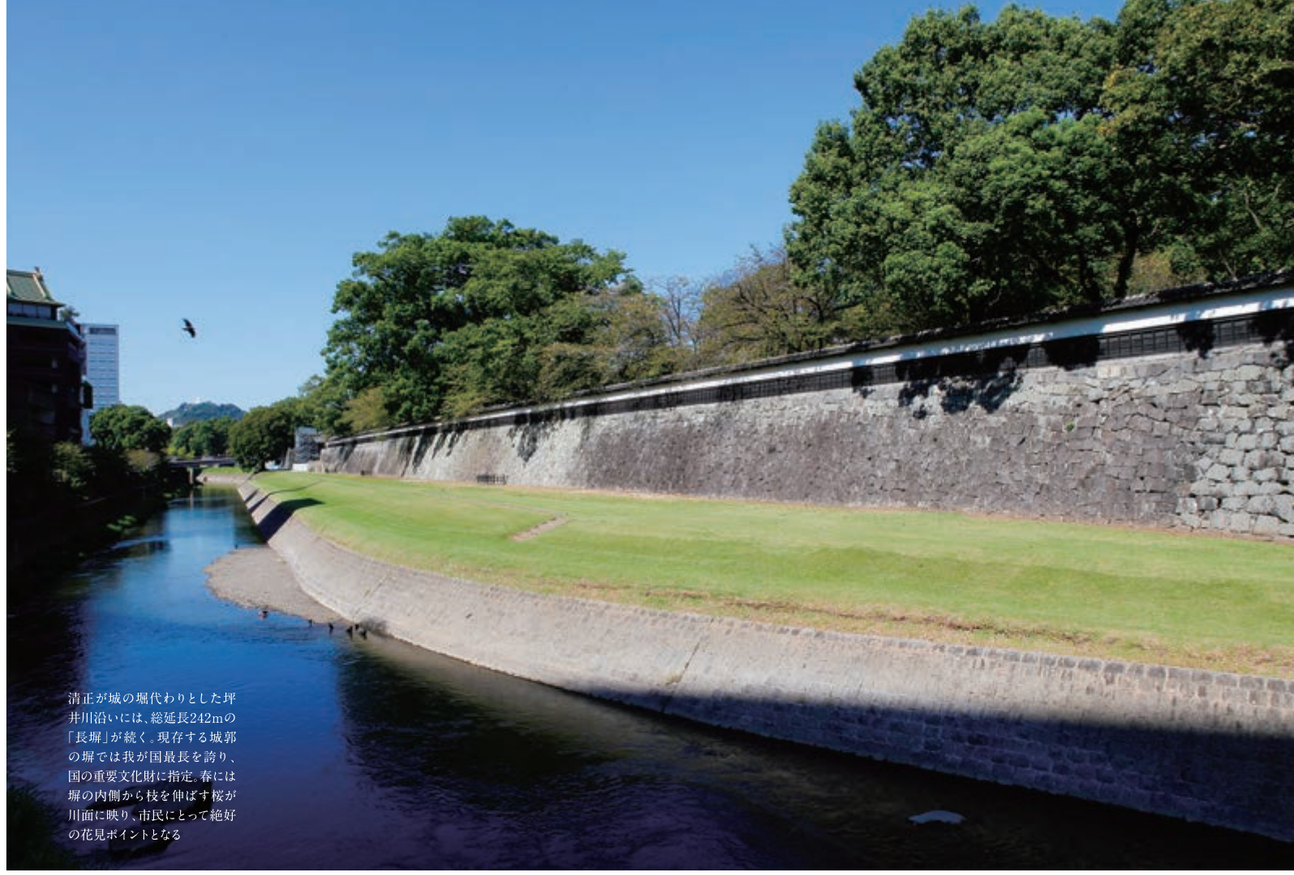
熊本城の難攻不落ぶりが実証されたのは西南の役の時だ。熊本城に立てこもった官軍を、薩軍は最後まで攻め落とすことができなかった。しかしこの時熊本城は炎上し、天守閣はじめ多くが失われてしまう。



(1)「二様の石垣」。右は清正が築いた石垣で「扇の勾配」と称される。左は細川時代に増築されたもので、技術の進歩により勾配が急になったことが分かる
(2)小天守から続く階段は11頁の石門へ出る抜け穴へと続く。小天守は豊臣秀頼を迎え入れるために建てられたという説が伝わる　(3)手前から四軒櫓、十四軒櫓、七軒櫓、田子櫓。現存する櫓の一部で、いずれも国の重要文化財
(4)石門の壁に刻まれた文字。永禄17年は西暦1704年。修復に当たった者が彫ったのであろうか

(1)「本丸御殿」で最も格式の高い「昭君之間」。藩主の会見の場だった。右側の赤い房飾りを引くと秘密の通路があったと伝えられている　(2)「昭君之間」の天井には、あでやかな花木の絵を再現　(3)「本丸御殿」大広間。手前の「鶴之間」から一番奥の「若松之間」まで通して使うと165畳あった。「若松之間」の右に「昭君之間」が位置する
(4)大広間側から露地を見る。かつてここに、1本の松と水槽があったという

復元された「昭君之間」の障壁画。「昭君之間」は「将軍の間」に通じることから、秀吉子飼いの武将であった清正が、秀吉の遺児である秀頼に万一のことがあれば熊本城に迎え入れ、西国武将を率いて徳川に背く覚悟をもってこの間を造ったという伝説が生まれた



清正が城の堀代わりとした坪井川沿いには、総延長242mの「長塀」が続く。現存する城郭の塀では我が国最長を誇り、国の重要文化財に指定。春には塀の内側から枝を伸ばす桜が川面に映り、市民にとって絶好の花見ポイントとなる

民のための徳政が豊かな現代の熊本の礎に。我らが「清正公さん」

熊本城が難攻不落であった理由は城の造りにだけあったのではない。熊本城は大規模な「惣構（そうがまえ）」を有する〝近世の城〟だった。「惣構」とは、城のみならず町（城下町）全体を堀や土塁などで囲み、防御の一環としたものである。清正は城の西側の新町地区を大規模な堀と土塁で囲うなど、防御性の高い町建設を進めた。町と城郭を一体とみなして難攻不落の〝城〟を造り上げたのだ。残念なことにこれらも明治以降に破壊され、現在は新町・古町界隈の区画や石碑のみ残る高麗門跡にその面影を残すだけとなった。

清正が城下を「惣構」としたのには城を防御する以外にも目的があった。城下町にはさまざまな職人や商人が集められ、経済・産業の中心となった。清正は「惣構」によって、戦からその拠点をも守ろうとしたのである。

経済を重視する考え方は秀吉から受け継いだものだろう。清正は「徳政」をもって肥後を治めることを目指した。「徳政」とは「民・百姓を治める者は武力ではなく、治める者の人徳でもって治める」べきとする思想である。民・百姓にとって理想的な政治であり、その実現のためには彼らが経済的に潤うことが必須だった。かつて吹き荒れた「国衆一揆」の嵐によって荒んでいた肥後は、清正の布いた「徳政」によって再生した。暴れ馬のように手の付けられなかった肥後もっこすたちは、清正を神と崇め、「清正公さん」と親しみを込めて呼ぶようになる。

焼失した大小天守閣は、昭和35年、市民の寄付金などを元に再建された。平成20年には築城４００年を記念して「本丸御殿」も復元された。城を往時の姿に還すべく今も復元計画は進行中であり、その資金源の一つとなっているのが「一口城主制度」による募金だ。他に類をみないユニークなこの制度には、県内外から多くの寄付金が寄せられており、熊本城が人々によっていかに魅力的な城であるかを実証するものとなっている。

高い ビルに遮られがちではあるが、今も市内のあちこちから城の姿を目にすることができる。清正が肥後を治めたのはわずか24年。没後息子の代で改易され、大名・加藤家は途絶えた。後を継いだのは名門・細川家で、細川の歴代藩主もまたよく国を治めた。しかし、地元・熊本の人々は言う。「私らにとって熊本城の城主はやっぱり加藤清正。今の熊本の基盤を作ってくれた〝清正公さん〟が肥後のお殿様なんです」。〝清正公さん〟が築いたお城は常に県民の心の中にあり、誇りとなっている。

「高麗門の跡」。城下町を守る29門の一つで、櫓門であり、門前には軍勢を集結させる「勢溜（せいだまり）」と呼ばれる広場があった。今は新町の一角にひっそりと佇む

江戸時代創業の「吉田松花堂」。「肥後の諸毒消丸」は万能薬として今なお人気。建物は西南の役で焼失した後建てられたものだが、どことなく城下町の風情を残す

加藤家の菩提寺「本妙寺」の参道には「胸突雁木」と呼ばれる176段の急勾配の石段がある。石段の中央には信者が寄進した石灯籠がびっしりと立ち並ぶ

「胸突雁木」を登り切ると、清正を祭る「浄池廟」へとたどり着く。毎年7月23日の清正の命日に行われる「頓写会」では、多くの参拝客で「本妙寺」一帯が明け方近くまでにぎわう

熊本市の目抜き通り・通町筋から見上げる「熊本城」。その堂々とした佇まいは市民の誇りだ